

小平西のきずな

「小平西地区地域ネットワーク」ニュース No. 34

2020年6月26日(金)発行

発行責任者:草野篤子(白梅学園大学)

TEL: 042-346-5639

住所:〒187-8570

東京都小平市小川町1-830

2020 フィンランド精神医療

「開かれた対話(O D オープンダイアログ)」視察から

白梅学園大学 子ども学部 家族・地域支援学科 土川洋子

北欧フィンランドのさらに北部、サンタクロースが住んでいるというラップランド地方の西部で1980年代から一つの精神科病院で始まったオープンダイアログ(以下:O D)という治療ミーティングが奏功し、精神疾患を患った患者の入院割合を劇的に減少させました。2014年になって、世界にこの取り組みが発信され、わが国でも2015年頃から注目され始めました。

筆者は、2020年2月にこの取り組みを視察・研修する機会を得て渡欧しました。視察・研修の詳細は本学の年報に報告として投稿を予定しております。

ここでは、西ネットの活動にも共通する「地域の力」に焦点を当てて視察の内容をご紹介します。

フィンランドの国土面積は日本とほぼ同じですが、人口はおおよそ1/23の約532万人です。そして、今回訪問した西ラップランド地方にあるケロプダス病院のあるトルネオ地区は人口62,000人と小平市の19万5千人の約

1/3です。しかし、西ネットがカバーする小川町～小川西町周辺人口は3万人未満ですので、小平市の精神科病院が西ネットのカバー範囲で、この活動を行うことは可能ではないかと思いを馳せながら受講してきました。

O Dとは、一言でいうなら、「精神障害者への対峙の手法ではなく、考え方、共に生きる生き方の哲学」と言えます。患者を取り巻く医療関係者はもとより、家族・友人・職場の同僚・隣人など関係者が必要に応じて一堂に介し、全ての人が等しく尊重され、包み隠さず対話することで、患者の生活環境や周囲の環境が改善していくことが検証されてきたのです。

前提として、全ての医療従事者は家族療法士の資格取得のトレーニングを受け、電話で相談を受けると迅速にチーム編成し、治療ミーティングの必要性を決定し、対応にあたります。この取り組みを長年根気強く継続した結果、160床あった入院ベッド数は現在25床中23床のみの入院とのことでした。

いかに家族・友人・同僚・地域の人々との共通理解が重要であるかということを目の当たりにしました。わが国でもO Dの取り組みの試行が始まっています。小平で始まることを願い、その際には西ネットの皆様の協力がなくてはならないと思います。これからの精神科医療の動向にぜひご注目下さい。

小平西地区ネットワークって何？

2012年3月17日に白梅学園大学関係者が様々なNPO、ボランティア団体、民生・児童委員、町内会、大学・学校などに関係する方々に呼びかけて「お互いの顔が見える人間関係が豊かな地域づくり」を目指して立ち上げました。個人ベース(団体の担当者でも可)の加入を基本とする開かれたネットワークです。市民の皆さん一緒に活動に参加なさいませんか？

かけがえのない日々をふたたび

白梅学園大学附属白梅幼稚園長

山形 美津子

初夏を迎えました。白梅幼稚園のシンボルツリーであるメタセコイアも青々と茂り、子どもたちとの再会を心から喜んでいるかのようです。

本園は緊急事態宣言により4月、5月と休園を続けてきましたが、6月1日より令和2年度の保育を始めることができました。

子どもたちの元気な笑い声、園庭を夢中に走り回っている姿、砂場で大きな山を思い思いに作っている子どもたち、部屋では家から持ってきた空き箱で工作を楽しんでいる子どもたち、友達と頭を突き合わせて何やら相談をしている子どもたち、飼育しているアヒルの世話をする当番の子どもたち、このような当たり前の日常が戻ってきたことにただただ感謝する気持ちでいっぱいです。

とくに3月末から4月にかけては、本来ならば学年が一つ上げるといことで子どもたちは、「バッチの色が変わって大きい組になるんだ」という自信にみちあふれて、年長組になったら「あれがしたい」「こんなことがしたい」と意気揚々と園生活を始める時期です。

当たり前のこととして繰り返されていた日常の生活が途絶えてしまったとき、改めて何気ない日常の有難さを感じることができました。今までの一つ一つのできごとや子どもたちとの経験がかけがえのないものだったのだと感じることができた今日この頃です。

今回の新型コロナウイルス感染症はまだ収束したとは到底言えませんし、新しい生活様式というものがいつまで続くのかさえ分かりません。でも、この地域に生きる幼稚園として私たちは通ってくる子どもたちに、この時期にふさわしい経験を、かけがえのない経験を、一つでも多くさせてあげることが重要な使命であると考えています。活動する中身はいろいろな制限が伴いますが、できる限りのことを精いっぱい取り組み、子どもたちの体験が

幼いころの原風景としていつまでも心に残り、やがてはこの地域に育ったことを誇りに思い、地域を愛する人に成長してくれることを願ってやみません。

子どもたちの夢をつなぐ

白梅学園清修中学校・中高一貫部校長

山田 裕

私の長い教員人生の中で、五月二十九日は忘れられない日になることと思います。三月当初から始まった新型コロナウイルスの感染防止による学校の臨時休業期間が三ヶ月間におよび、その間、家庭での学習に加えて自粛生活を送ってきた生徒たちが久しぶりに登校する待ちに待った日でした。

子どもたちにとって日本の三月は進級する学年や進学する学校への夢や希望が芽生える時期であり、四月は、世代ごとそれぞれに人生の新しいスタートをきる時

期で、社会全体が祝福と応援の雰囲気にあふれ、春の暖かさの中で気持ちも高揚する季節です。しかし、なかでも、昨年度の多くの小学校六年生、中学校三年生、高校三年生は、参列者のいない卒業式となり、さらに進学先の学校では入学式も行えず、どんな学校なのか夢に見ながら待つという二ヵ月間であったかと思えます。

本校(白梅学園清修中学校)では、この間、新一年生の進学への期待に夢をつなぐことに様々な工夫をしてまいりました。オンラインによる学習課題に取り組むだけ

でなく、ZOOM でホームルームを行ったり、一週間に一回は担任と電話で話したりしました。また、上級生が情報の授業としてオンラインで制作した動画を YouTube で配信し閲覧してもらうことで、清修中学校の一員となったという意識をもってもらおうとしました。

私が小平市教育委員会に在職していたころから、小平市では「地域で育てよう健やかな子ども」を標語に、学校が地域、保護者との連携を重視してきた歴史があります。運動会、入学式、卒業式などの学校行事は、地

域の方々をお招きして、子どもたちの成長を祝福し、これからも見守りながら応援していくというメッセージをいただき、子どもたちに地域の一員であるという自覚を育む機会として、大切にしてきました。

子どもたちの夢をつないでいくことは、学校だけではできないことです。まさに学校と家庭、地域が一体となって、子どもたちが夢や希望をもって挑戦し続けることができる社会を整えていけることを願っています。

新型コロナ禍から考える

—グローバルから、地域住民を主体としたパラダイムの転換へ— 草野篤子(白梅学園大学名誉教授)

1947 年に、フランスのノーベル賞作家、アルベール・カミュ (Albert Camus) が発表した「ペスト」は、アフリカ、アルジェリアの都市で高い致死率のペストが蔓延し、死者が急増、感染拡大を防ぐために、街がロックダウン(都市封鎖)され、人と人との関係が断たれ、市民が孤立状態に陥ってしまう話です。

歴史を振り返ってみると、今から約 100 年前にいわゆるスペインかぜ (Spanish Flu (influenza)) が、1918 年に始まり、1920 年に至るまで世界各国で蔓延しました。これは「1918 年インフルエンザ」の世界的な大流行であり、多くの死者を出してしまいました。この時期は第 1 次世界大戦の最中であり、主に米軍兵士がヨーロッパに戦闘を進め、ワクチンや治療薬もないインフルエンザを拡散してしまったと言われています。この間に、世界中で 5 億人が感染したとされ、これは当時の世界人口の 4 分の 1 に相当すると言われています。

ちなみに、「日本の細菌学の父」として知られ、ペスト菌を発見し、また破傷風の治療法を開発するなど感染症医学の発展に貢献した北里柴三郎が、日本でマスクの着用を訴え、この時の経験で、日本人は欧米人と違って、マスクを着用するようになったと言われています。

今回の新型コロナウイルスの蔓延から見てきたことが、いくつかあります。まず第 1 に、日本の医療政策が全く不十分であるということです。行政改革の一環として、

1994 年の保健所改革により、保健所の数が約半数に削られ、人減らしをしてしまった結果、今回のような緊急事態が起こっても、PCR 検査など全く対処出来ない事態を引き起こしています。病院で使用する医療用のガウンは 100%、人工呼吸器は 90% 海外依存、中国に頼り切っているという現状です。

地域住民の生活を無視し、経済的利益を最大化することを最優先にしてきたグローバル経済とその社会を、新しいインクルーシブな人間中心の、かつ生態系を優先し、地球環境を重視したパラダイムへシフトすることが求められています。社会の不安定性、格差の影響は、特に非正規の労働者・勤労者、女性、零細自営業者、ひとり親家庭、フリーランスの人、高齢者などに広がっています。

コロナ後の社会は、地域住民の生活に目線を合わせたパラダイムの転換と社会変革が切に求められています。感染症の蔓延を防ぐ体制を確立するには、国の予算配分を、国民本位に大きく舵を切る必要があります。子どもの学校における 20 人・30 人学級の推進、大学生への授業料免除、科学の価値を重視し、医学・医療の発展のために常日頃から財政的な支援を重視する信頼できる政府や政治が、コロナ後の持続可能な社会を実現するには、必須となるでしょう。

クラブハウスはばたき

地域活動支援センターはばたきにおけるコロナ禍での活動

クラブハウスはばたき/地域活動支援センターはばたきは、精神障がいの方を対象として就労継続支援B型・地域活動支援センターⅢ型の二つの事業を行っていますが、ニューヨークのファウンテンハウスを起源とする精神障がい者のための地域生活支援モデル「クラブハウス」を基調として、生活支援から就労支援、余暇活動支援などを包括した総合的なサービスを一体的に提供しています。

クラブハウスの特徴は、施設の運営に必要な業務をメンバーとスタッフが協力し支え合いながら仕事をするを通して、社会的に孤立しがちな精神の障がいを持った方に、社会との繋がりを取り戻すために必要な意欲や自尊心、コミュニケーションスキル等の回復を目指すところにあります。クラブハウスの活動は、メンバーとスタッフが話し合い協力して業務を行う”密な関係性”を基本としているため、今回のコロナウイルス感染拡大は非常に大きく影響しました。

収入が限られ食生活が偏りがちなメンバーの生活習慣病リスクは高く、安価でバランスの取れた昼食作りと提供はクラブハウスの重要な役割の一つでもありますが、感染リスクを考慮して自粛せざるを得なくなりました。通所に伴う移動中の感染リスクを避けるために、活動時間を短縮しており、施設内での”密”を避けることもあって、運営についてメンバー・スタッフが話し合う会議も開催できなくなっています。メンバーの中には高齢であったり持病を抱えた家族と同居しているために、通所や外出を控える動きもありました。企業での就労体験プログラムは、通勤のリスクを考慮して停止となり、就労中のメンバーへの定期的な職場訪問・定着面談なども出来なくなっています。

緊急事態宣言以前は、スーパーやドラッグストアなどで

の一部商品の買い占めなどもあり、はばたきでは単身生活者向けに「保存食セット」を備蓄したり、マスクを購入してOBメンバー含めて登録者全員に配布・発送した



施設内の密を避け、運動不足を解消する玉川上水散

りました。通所できないメンバーには、ネットのビデオ通話やメールを利用して施設経理などの事務業務の一部を分担してもらい「在宅利用」等も取り入れました。また、LINEのオープンチャットを利用した通所困難なメンバーと通所しているメンバー・スタッフとの交流の場の提供、通所困難なメンバーへのビデオ通話を利用したオンライン面談なども行っています。

先の見えない状況の中で、私たちがなりに工夫しながら活動を継続していますが、地域の他施設・機関から情報を頂いたり、国内外の他のクラブハウスと情報を共有し、活動のヒントにしています。クラブハウスを統括するクラブハウス・インターナショナルは「私たちはメンバーとの間に社会的な距離(ソーシャル・ディスタンス)を取らない。物理的な距離を取るに過ぎない」と述べていました。今後も地域やクラブハウスの連携の中で、メンバーが孤立することのない支援を継続していきたいと思えます。

大学の街西ネット・学生模様 NO.3

白梅学園短期大学・大学の巻

金田利子(元白梅学園大学教授)

これまで、西ネットで出会う学生たちの模様をミソヒト(三十一)文字で紹介してきました。

前々号に「武蔵野美術大学」、前号に「朝鮮大学校」、そして今号が、白梅学園短期大学・大学の巻

です。

この西ネットは、地域の方々と白梅学園大学の手繋ぎで生まれてきました。ですから、西ネットの皆さんには一番身近なのですが、「白梅」がどんな風にどんな理念で生まれ発展してきたか、「灯台下暗し」なのかもしれませんし、生き字引のようによくご存じなのかもしれません。一度きちんと

した紹介も必要かと思いますが、それは目下白梅学園現役の方にお問い合わせするとして、教員を「卒業」した私は、ここで自身が一緒に始めた子育て広場での学生たちの姿を中心に、その成長を支えてくださった地域への感謝を込めてミソヒト文字にさせていただきます。

- ◆ 学生と地域を結ぶ教育に GP（*1）を得てはや15年
- ◆ 白梅の「子育て広場」は地域にも すっかり知られて期待の星に
- ◆ 子育てに「世代間交流」取り入れて 老いも若きもつなぐ学生
- ◆ その初めおそろおそろでオリーブ（*2）の 門をたたいて人生を聴く
- ◆ 高齢の仲間は広場の大人気 むかしの遊び 引き出し学ぶ
- ◆ 朝大の保育科仲間呼びかけて 子育て広場を国際的に
- ◆ お知らせは地域を回って手渡して 学びの糧得て授業に臨む
- ◆ この学びみんなに返すシンポジウム 地域の支援組織とつなぎ
- ◆ 地域との相互貢献頼もしく この体験を持って羽ばたく
- ◆ 取り組みの過程に涙笑い愛 青春の日々生涯の基礎
- ◆ 白梅のヒューマニズムの精神は 地域の支え有りてこそ育く

（*1）GPとはgood Practiceの略記で、文部科学省の大学・短期大学の良い教育への補助金

（*2）オリーブとは水車通りの交差点にある高齢者のデイサービスセンター

新型コロナウイルス、挑戦・応戦

西の風(第2ブロック)芳井正彦

本年2月、我が「西の風」エリア内に初の「カフェ なかじま」がオープンし引き続き2カ所目開設準備に取り掛かった矢先の「コロナウイルス」騒ぎ。瞬間に全世界に拡大パンデミックと認められた。今回ほど感染症の怖さを感じたことは無い。歴史を紐解けば、14世紀にはペストが流行し3000万以上の死者、16世紀には天然

痘で3000万以上、19～20世紀にかまけてはコレラで350万以上、20世紀に入ってからスペイン風邪で4000万以上に達し、感染症が歴史を変えたと言われている。近くはエイズも大流行した。これらは過去のことであり遠い国のことであり、自分には関係がないと思っていた。ところが今回はお隣中国が発生源であり最初の発表が

正確でなく、豪華客船内での対応の不味さ、死亡者の多さ(後に欧米諸国が群を抜く)であり、何かおかしいぞとを感じる。感染しても80%は軽症であるといわれているが、病状が急変してあっという間に数日で死に至ることがある。特に高齢者や基礎疾患を持っている人は十分気を付けることが大事。その顕著な例が、人気お笑いタレントと有名女優の急死の報道である。このニュースには本当にショックを受け油断ないぞと決意する。

拡大する感染者数に対し、国と行政は抑えようとしてテレワークの推進・3密の徹底・手洗い・マスクの着用等々を訴える。相変わらず感染者数の増加に対し、遂に、緊急事態宣言を発出。日々会見し、新たな感染者数を発表。繰り返しになるが、新しい生活様式・社会的ディスタンス等々の徹底を図る。この頃、欧州の主要都市でロックダウンが起こりゴースタウン化する。日本でも医療崩壊が起きないかと危惧される事態にまで逼

迫する。GWの行楽・不要不急の外出は自粛・ホームステイの徹底・飲食店には時短を要請する。

このように、目に見えないウィルスとの闘いとの戦いの末、ようやく新たな感染者は減少し始め、終息の見通しが立ったということで、1ヵ月半で緊急事態に終止符を打つ。これで以前の日常に戻れるかというところではない。専門家は第2波3波が必ず来るという。感染者はゼロではないので、油断し気を緩めるとオーバーシュートすると警告を発している。世界では今なお拡大している現状にあって、いち早く終息させた「日本方式」が評価されているが、ワクチンの開発でも世界をリードする技術力を発揮することを望む。

新型コロナウイルスとの闘いの中で経済の立て直しを最優先課題としつつ、浮かび上がった医療問題。教育問題等々にスピード感を持ってしっかり取り組んでもらいたい。以上。

修了証書を11人に“宅配”

奈良勝行(西ネット大学世話人)

「分かった会」は、去る3月9日に11人中3生のために「修了式」を開く予定でしたが、コロナパンデミックのおかげで4月9日に延期しました…。結局それも中止で、私がやむなくその前後に、修了証書、思い出文集、講師のメッセージ、記念品(ノート2冊)の4点セット



を11人の修了生の自宅に届けました。生徒の多くは「休校措置」で在宅していて、最初は玄関先で思いがけない訪問にびっくりしていましたが、「どうもありがとうございました」と神妙に受け取ってくれました。

なお、11人の修了生全員がおかげさまで都(私)立の

高校に合格でき、進学しました(あらためて感謝します)。

このコロナ騒動のおかげでもちろん分かった会の講座は、小川公民館の閉鎖によりそれ以降もずっと「休講」。再開はいつになるのでしょうか…。今在籍している中学生(12人)も講師もストレスがたま一方です…。「生徒の顔をまた見たい」——講師の皆さんが実感している毎日が今後も続きます……。

生徒の「思い出文集」から：Aさん「もともと思い出に残っているのはイベントで出されたクリスマスケーキとカレーライスでした。先生たちありがとう!」、B君「一番に印象に残っているのはバレンタインの日に配られたチョコレート。二番目は、都立の過去問のプリントを配ってもらったこと(これが役に立った!)」

講師からのメッセージから：①高校ではしっかり勉強して自ら考える人になってください。お友達とまわりの人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、②フランスの思想家ブレイズ・パスカルは「人間は一本の葦(あし)に過ぎない自然の中で最も弱いものである。だがそれは考える葦である」と言いました。「考える力」を育ててください、③目標を持って生きていけば必ず道は開けると思っています。また分かった会に元気な姿を見せてください。など。

ベトナムを訪ねて 25 年

— 多文化共生を求めて —

瀧口優(保育科教員)



学生時代ベトナム戦争がありました。日本の沖縄からアメリカ軍がベトナムに向い、多くのベトナム人が殺されました。日本がその殺人に加担していることに多くの人が反対しました。私自身はそれほど強い反対を思ったわけではありませんが、どこかベトナム人に対して「申し訳ない」という気持ちと、何かできることがあればベトナムを支援したいと思っていました。20年後我が家にベトナムの英語の先生が泊まりましたが、その時にベトナムの保育園にはおもちゃがないということを知り、日本からおもちゃを送る運動を始めました。そして実際のベトナムがどのようになっているのか知りたくて、送る会の会長である妻と事務局長の私(二人だけの会でしたが)でベトナムのフエという町に出かけて行きました。

フエの空港に到着して町の中に進むにつれて経済状況の厳しさを実感し、あらためて支援することの意味を理解しました。年は1994年、ちょうど日本が国連の「子どもの権利条約」を批准した年で、ベトナムでは日本のテレビ番組「おしん」が大人気でした。フエでは保育園を訪問し、自分たちが日本から送ったおもちゃが使われていることが大きな喜びでした。そしてベトナムの人たちの優しさと家族や地域の結びつきに、自分の生活を見直す機会になりました。それからほぼ1年おきにベトナムを訪問し、一昨年暮れ妻が亡くなったのを機会に6年ぶりの訪問をしてきました。「一人になったんだからベトナムに来ませんか、私が世話をするから」という30代の

若者のことばを聞いて、高齢者が尊重されていることを実感しました。

昨年は学校訪問を減らして障がい者施設を4カ所訪問しましたが、まだまだベトナム戦争の後遺症が大きいことが分かり、自分がベトナムに行く新たな意味を見つけました。枯れ葉剤が原因で体がつながって生まれたベトちゃん・ドクちゃんの例は昔のことと思っていましたが、未だにその影響を受けています。今できることは募金程度ですが、それでも何か役に立つことにつながればと思っています。

ベトナム、とりわけフエの町は日本語の学習が盛んです。中学校に入ると全ての中学生が日本語を学んでい



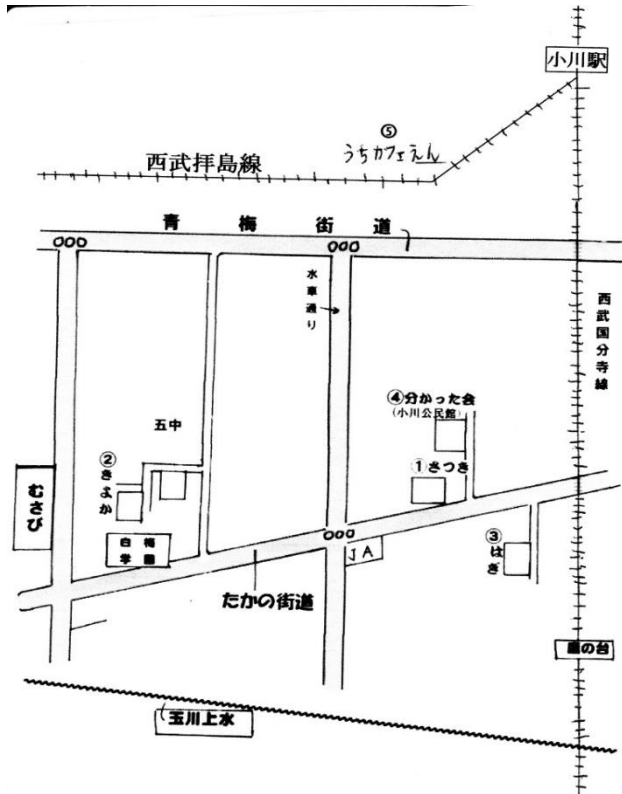
ます。その人たちが技能実習生や留学生として日本にやってきます。この10年間で10倍近くになり、現在日本には40万人近くになります。小平にも100人以上在住しているようです。現在日本には300万人近くの外国籍の人がいます。その中には戦前から日本にいる在日朝鮮人の方々が50万人ほどいます。在日の方も含めてこれからの日本は多くの外国籍の人を受け入れることになると思います。ベトナムの人々の優しさを心に、日本でも多文化共生の街づくりをすすめられたらと思っています。小平市は来年度からの12年の長期総合計画を立てていますが、その柱のひとつに多文化共生が入っています。

ベトナムに関心のある方はぜひ声をかけてください。

皆さん、コミュニティ・サロン(下の①～⑤)と「中学生勉強会」(④)に足を運んでみませんか?

お待ちしております! (右の地図を参照)

- ① ほっとスペースさつき
毎週火曜と木曜 10:00~16:00 (4月2日から移転先へ)
問い合わせ: 渡辺 穂積
TEL: 042-344-7412
- ② ほっとスペースきよか
毎週月曜 11:30~15:30
問い合わせ: 石川 貞子
TEL: 090-7732-2089
- ③ アットホームはぎ
毎月 7, 17, 27 日: 14:00~17:00
問い合わせ: 萩谷 洋子: 042-342-1738
- ④ 「分かった会」小中無料学習教室
毎週木曜日 18:00~20:00 (小川公民館)
問い合わせ: 奈良 勝行 (講師募集中!)
TEL: 090-4435-4306
- ⑤ 子育てサロン「うちかフェェん」(小川町)
毎週月・水 13:00~15:30分
問い合わせ: 伊藤絹代
TEL: 090-5441-6219



西ネットの今後の予定

- 地域世話人会: 07月07日(火) 18時~
- 大学世話人会: 07月21日(火) 18時~
- 大学世話人会: 09月01日(火) 18時~
- 地域世話人会: 09月15日(火) 18時~
- 懇談会: 09月29日(火) 18時~
- 大学世話人会: 10月13日(火) 18時~

イベントの予定

(コロナウィルスの影響でほとんどの計画は未定です)

西ネットの世話人

ブロック	地域世話人	大学世話人
1	西 克彦・丸山安三	瀧口 優・杉本豊和 福丸由佳・山路憲夫
2	足立隆子・芳井正彦・ 今野志保子	午頭潤子・土川洋子 吉村季織
3	石川貞子・大内智恵子・ 久保田進・穂積健児・ 杉浦博道・吉田徹	金田利子・草野篤子 西方規恵・牧野晶哲
4	桜田 誠・萩谷洋子 福井正徳・細江卓朗 渡辺穂積	井原哲人・森山千賀子
全体		奈良勝行・長谷川俊雄

お願い: この広報紙『小平西のきずな』の編集方針は、「顔の見えるネットワークづくり」を目指して参加団体(者)の活動などを紹介し、文字通り「市民のきずな」を築いていこうとするものです。ニュースの全部または一部を改編することはお断りします。もし使用したい場合は編集担当(奈良まで)お申し出下さい。

投稿募集: このニューズレターは皆さんと一緒に作るものです。活動の報告やイベントの企画などについての原稿をお寄せください(奈良勝行)。

メール: ever.onward.nara@xd5.sonet.ne.jp

編集後記: 「小平西のきずな」も今回で34号を迎えます。3ヶ月に1号の発行なので、8年この小平西地域の動きを伝えてきました。もちろんここに載せられなかったものも沢山あるので、それらを含めてもっと地域の顔が繋がっていくことを期待しています(瀧口)。